序　文

2008年は日系ブラジル移民百周年にあたり、両国では数多くの催しが開催された。本シンポジウムはその一環として、日本とブラジルの人文社会科学における交流を促す目的で企画された。これは日文研が中南米で共同開催する最初の国際研究集会である。サンパウロ大学日本学科は南米大陸で最初に設立された日本学科で、これ以上ふさわしい場所はない。

シンポジウムはただ百周年記念に合わせるために急いで企画されたのではない。2005年より2007年にかけて、サンパウロ大学日本学科のジュンコ・オタ、マダレーナ・ハシモト、サンパウロ・カトリック大学クリスチネ・グレイネルが、それぞれ数ヶ月間、日文研に外国人研究者として滞在し、非公式にサンパウロ大学でシンポジウムを開催する可能性について相談した。移民史を日本文化のなかでどう位置づけるのか、ブラジル文化との関連はどう扱うのか、というような議論をした。2007年8月には細川、ティモシー・カーン、井口かをりがサンパウロ大学を訪問し、具体的な話を進めた。シンポジウム開催の一ヶ月前より、稲賀繁美が日本学科で集中講義を行っていて、連絡役となってくれた。シンポジウム翌日のサンパウロの東洋街リベルダージとサントスの港やコーヒー博物館の見学に関しては、サンパウロ大学の森幸一の協力を得た。こうした長い準備の成果が見事に実ったことは、本報告からわかるだろう（サンパウロ大学側では本報告書のポルトガル語版の報告書を編纂中である）。移民研究と日本研究とはこれまであまり交わりがなかった。その隙間を埋めるきっかけを作るという当初の目的は達成できたと思う。

個人的には、サンパウロ大学日本学科創設時のメンバーで、2008年奈良県より万葉文学賞を受賞したジェニ・ワキサカ名誉教授とほぼ15年ぶりに再会し、柿本人麻呂に関する講演をいただいたことに、深い感慨を覚えた。彼女が古典文学の勉強を始めたころには、日本語を母語とする世代が日系社会で力を持っていた。その反面、頼りになる資料を見つけることはブラジルでは非常にむずかしかった。それから50年、教員や学生の大半は家庭内でも日本語を使わない。一方、サンパウロ大学のように充実した図書館もある。ワキサカ教授から見れば、現在の日本学科の教員は二世・三世にあたる。そして教員や学生の関心は古典文学や言語から、美術、現代文学、大衆文化に広がっている。講演後の老教授と学生の歓談の場面を見ながら、三世代にわたるサンパウロ大学日本学科の歴史を実感できた。同学科のますますの発展を祈りたい。

細川周平（日文研側実行委員長）